

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

1m 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

卷之十目錄

尹鬚頭 王探花 穩姓

楊忠烈 李焞 成御史

汪希文 河南某縣仙

薛衣道人 趙如々 松祖

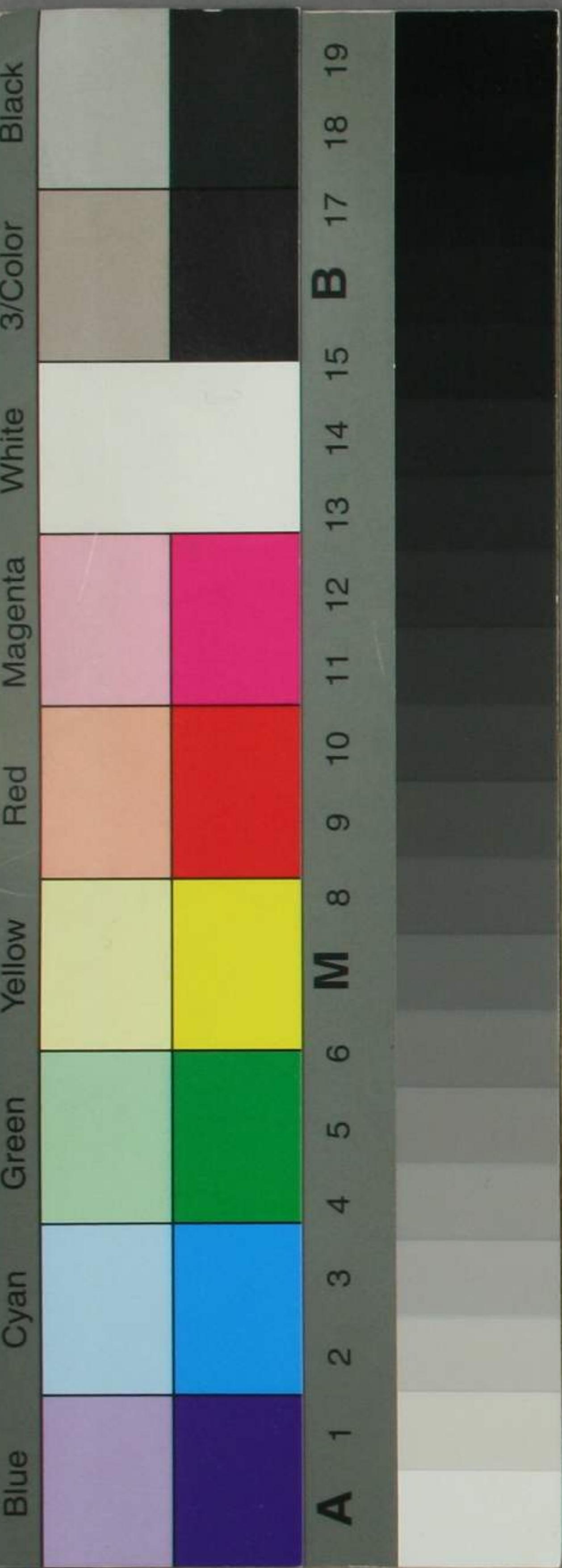
羅道人 嵩山道士 宋道人

張谷山 邱生

通俗排悶錄

卷之十
九

~13
3144
11



大日本始發代具本屋

大歸庄題印

通俗排闥錄卷之十

仙縁之部

目錄

尹鬚頭

王探花

蘓姓

楊忠烈

李淳

成御史

汪希文

八月
3144
十一

河南某縣仙

薛衣道人

趙如如

松祖

羅道人

嶺山道士

宋道人

張谷山

邱生

合十六種

通俗排問錄卷之十

仙緣之部

尹鬚頭

全亭正直

校

六樹園翁

譯

尹鬚頭を名へ從龍とす。華州の人あり。囊中の中の宋の理宗皇帝の時の道士の度牒。度牒を今國家の玉の倫旨の如くある。明の弘治正徳年の間金陵地名め至り。成國朱公候之を供養する事甚便たり。尹能神を出で身を數所に分く。赴く朱公尹が向く我へて。古洞賓先生が見えん事を欲す。可うりんやと云ふ。尹が曰可あり。公朝日み水西門外の劉公廟へ往く。香を拈せよ。我呂洞賓。宋の代々仙とを約へ來り。一會を奉らんと云ふ。其目が成て香を拈る。

帰りけり。寂として見ゆ所あり。帰来く尹を責め、謊を説きと
云ふ。尹曰。公曾て路上み一道人の醉たるが。酒瓶を施め、と睡る者を
見玉ひくるや。公又うりと云へ。尹曰。道人瓶を枕ゆも。両の口相對せるも。
分明に呂字あり。公自悟らぞ。何ぞ我を謊と説と云あやと云。此又
於く人を四路又遣く。之を見むども。皆絶に走く未遠りと余ノと
云へ。其行方を見ゆとあん。若ふ一貴人の閨女ゆ。重き病かかく
容瘦く苦しめる。名醫皆効無けるを。母愈ゆくと尹を激て
視せられバ。尹曰。是人癆虫也。尚嚼すべーと云ふ。貴人何の藥を
用ひん。と向へを曰。藥力治する。更能べず。只我と同宿一夜せば便好らん
と云ふ。貴人大怒と許さむ。後ふ女の病日々ふけのり、萬ふ一を

生れ死理あらず。至ゆく。母泪あらず。尹曰。女を云々なれば。貴人之を許
たり。尹女の室ふへく少一の穴をも。皆紙ふ糊くと張て。錢を多きの
穴をも遺さず。一榻を設て帳を用ゆ。女をくと其綿衣を去らる。手を以て足を摩。心極く熱する火の如し。摩く女の陰戸の左右
ふかす。叔睡らんとく女ふ戒と云。喉より虫有く出べー。急め我を
呼べーと云々睡す。鼻息あくとも雷のぬき声とあをす。女ひりで
眼を合せん。天明んとする比女告ぐ。虫口中とく飛出つて定て一人を害せん
とぞ云々。此夜女の乳母故心せざるをけど。一孔を開て窺居るが。病
虫已か乳母が腹内ゆぞ入る。父母之を視えど。女の顏色已に変る。

尹笑々ちりぬ。後數月女婿を擇る時かやうと乳母も果して死みせりとぞ。又茲の賈あす。婦を娶りクルガ。尹偶其家來至く。帰し見て急か走りよそく抱けた其頬を咬む。自力姑驚き隔て引けられ。尹歎息して曰。恨べ一両歟と咬断つ。尚一段あると断きをりふせんと云ク。皆何のゆふ言古文を知者有。後夫婦不和ふと妻遂に自縊て死ふたり。時。紅緞の絆儀ふ一股断せば死するふ至り。人其先見ふ股へたり。府尹尹が仙跡露を下す。人心を惑乱せんと。押使を添え華州帰り遣らんとす。監押の軍人云。我等押歟毎ふ常例あまく銀を取り。料るふは銀錢無く。我妻子何を以て過活せんと云べ。尹曰。汝が家ふ需る。

所も柴と米とふ過ぎべ。何の辯一難き事やうん。汝ふ両斧を與へん。一も灶上ふ貼ま。一も米桶ふ貼と用る時自足らんと云。後柴米共ふ用をふも盡りたり。軍人華州より帰り。後柴米を用んとまと共俱ふ盡く有らざり。是れ頭其より華州の鐵鶴觀中地す。鐵鶴ふ騎く天昇へると。あん。

王採花

明の翰林官王公教。字を雲芝と云。新城郡歷城の人。成化二十年甲辰の進士及第。進士第の第二工あり。諸生の時書を讀く牛山寺。寺のふ臥く在。夜地上ふ火の光わくを。發不立石画を得。中ふ書二冊。是を獲てよう風ふ御。

神とおもひ。未來の吉凶を知る類の通をぬく。此公平生異古事
甚多く。嘗て僧と枸杞を采て山に登り。僧先づちて山を
下まく門を抜けた。公已め先在て扁を啓てかづれば僧大歎驚た
うとぞ。河南四川名の督學の官へ。試日書生院の密庵と
鑽さんとす。窓廡の中各一公ある。一日白雲
一片を刈り。騎ふ帝と之を追ひしむる。雲地み落々化して
石とあをり。其色雪の如し。煮て食へ。其甘事飴の如し。公の
曰。此雲母也。輝縣山と云山み行く。輿より下て拜して曰。丈を
此みをうくる。逆地を掘らせ。奇石を得。是を百泉書院
置ふ。又道の左あり古垣の中。紫石硯二枚を得。各鷺鷺

一腹あり。雌雄相向り。嘗て云。我目ゆき天地针師眼の如し。
凡異寶埋る。皆見ゆと云う。枸杞を采て僧病。終ふ
臨める時。公其欲まる所を問へ。僧う云。富貴之を蓋ん事を
欲すと。公曰。但一藩王と作らふ堪たりと。朱りと
其背ふ蜀王と書く。王第二子を生た。時背上癰。其
字跡ぬ。尹恭簡是と云。人病りて臥た。入見を訪
大鶴の。室ひぐく飛旋。已ゆく。賜く去り。此是公の神矣
け。終南各地の園子祭酒が官なり。預死期と知り。身終る時
四城門の人皆公の羽衣鶴氅を着。去り。往々云水道人の如
きをよど。又鄉人の良御道中と従者あらず。道多く寂寥

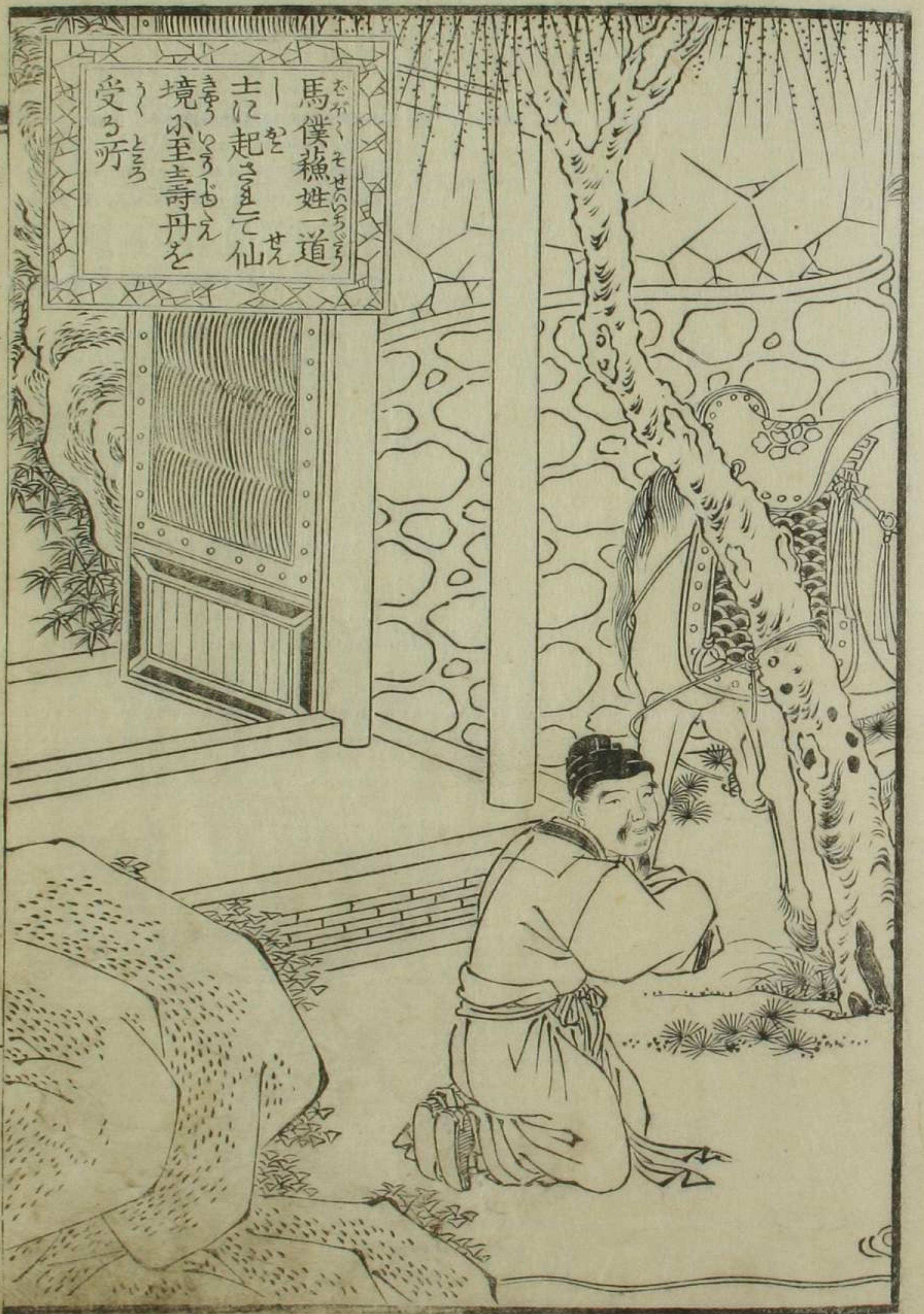
吉戸南より來るを遇へり。之と視て公めぞ有る。

蘇姓

嘉靖年中。孫錦衣まきい馬僕まく某と云者あり。柳の陰かげ臥居あぐたり。一道士通うつりかよる。足先あしめて起あがりて曰い。汝なが面おもて何なにぞ。陰德いんとくの歎あわニキと云。蘇そ曰い。食人くじんあそび。陰驚いんけいの成なり死し無なくと云。道士しゆ強たけく向むかひ。平生攀犧馬牛はいの類るい。皆みな力を極きわく愛あい護まつる。其生きみを殘のこす。其その力を盡つくさず。食くを得とるを極きわく難むずく。婦めと稍すこ饑うと療さす。更またを得とど。其餘のを丐あこ。道士しゆ曰い。是これふちそむと我わふ隨まて來く。飽あまぐ食くせる。之これと答こたふ。道士しゆ曰い。是これふちそむと我わふ隨まて來く。其居所ゐよしょが至いたり。松櫻柏殿まつらぎはくでん白鶴青鳩しらつるせいじゅあり。皆

人間ひとの物ものあらば。蘇そ曰い。悟さと。跼蹐きつくせんせん呻吟うめき。日ひ。今日主人の馬草くさの銅つう無なし。罪我身みがみあり。且我妻明朝あさひの食く無なけど。辭さして去くをあんと云。道士嘆ためく。汝福うふく無なし。必歸はからんと欲ほすやと云。明朝あさひに至いたり。破草履はく一足いつそくと。藜一粒いのしを出だして之これを授たまけ。汝なれど以いて京きょうに帰かると云。蘇そ辭さし。本ほんと京きょうに抵しのぶ乃のの。其城門じゆを見み。北きた京きょう非ひぞ。蘇そ驚あわく。何なにあると向むかて門卒もんしゆを云。此こを滇み南なん地じ緒しゆの城じゆあり。と云。蘇そ哭こゑ。曰い。道士我わを陷おとす。滇み南なんを京きょうを去はる。萬里まんりの路じあり。犯はか一錢いつせん無なして何なにに由ゆく達たつる。更またを得と。蘇そ其その状じようと道みちの状じようをりん。何なに物ものとゆく汝な贈たます。と向むかて。蘇そ其その状じようと言いひ入いり薬やくと屢たびとを與よ。更またと語かた。門卒もんしゆ曰い。此こも我わ大だい仙せん。

革本繡像摸寫



あり。汝輕々く之を棄つ。然と共二寶ある。何ぞ帰ぐたるのみ
我りの宿。數日を等べ。汝が爲ふ衣の泥を洗へんと云ふ蘿之を
俟く始く仙人ちる事と悟る。又ゆるふ已ぐ寶を奪ひとやせんと心
ぼきく。即時か辭して其所を太客店に宿り。明日かありて。屢
と着てあらめが自雲中を行ふ。耳のいた隠々する音を聞のき。藥を
以て口中の含け玉を聊々と食す。一日か千餘里を往く。遂に七八日ゆく
京ゆぞ着る。筋れる藥を以て帰ふ啖り。主人顛仙ぎりより來す
一と喫く。馬を蓄せず。夫婦を養ふ。壽皆百歳の近く
て卒しぬ。主人其屨を着て園中を行けば。飛ちゆうそ有る。其屨卒
しよ遂の屨の在所を失へりと云や

楊忠烈

大洪池の楊先生連と云入。微そうりより楚の名儒あり。京の學く
享問の試験後其撰いい入いて候やと待まる時及第の名を
告く来る者ゆ。時か食くく在る。哺はを含むら出だく。楊某ゆ
否やと問ふ。彼者無と答こたへ。心も消きる如ごう。食を嚥のく而
入るが遂に病塊がと成る。壹いつ祖甚苦くる。衆勸すすめ駕かせ遺お金かねを
さへかまれ。公覺無を患うひ。衆十金かなを醵あつく之を行く。
送はなふ公強たけく道みちを就く。其夜夢ゆめふ人告して曰い前途ぜう外ほか人じんゆる能めい君きみ
病びやくを愈ゆさん。古いく之を求め。ちよふ臨らく詩しを贈よて曰い江邊こうへん
柳下三弄笛。抛向江中。莫歎息なげきの句くを唱うたふ。叔翌おと日途とかと。

黒して道士の柳下み坐せるふ達が因く哀ふ疾を告く請ひを。道士笑く曰子恨る莫甚。我何ぞ能病を療さんや。諸三弄を為して可ちとんの事と云く笛をかへて吹く公夢乍々。如はゆえと。愈并く切く求め。且囊と傾く金を出して之を歎す。道士金を接く前より流か擲あらう。此金人の驟りく與へる物ゆく考へたモかく。大か駕馬手と惜き悔けむ。道士曰君ひまご此金を心残りや。金を江邊か在り。諸自之を取ると云公詣を視る。黒く其侵有たり。益奇ありとて呼び仙と稱しけむ。道士漫み指さしとて曰我を仙非乎。彼處より仙事と云公圓顧主に強く其項を拍て曰俗ある哉。公拍れく口を張り声を作せ。

喉より一物を吐出しく地に墮せ。俯して之を破て見よ。赤血絲の中から飲する飯包をもと存せず。病忽失め如し。頭を巻き道士を視。已ふ杳み去と見えず。

李焯

李焯も字を振雅と云く長垣地の人。萬曆年甲辰の進士。道術を好む。不灰木を火爐に蓄え。爐中香の烟自起る。呂洞賓其室に降て共語言もる終夜。惟一人小僮のみ之を知り。餘人の耳みとへず。青州の知府が官。府の後は園あり。前後の宇園を遊ぶ者多く輒病法をけむ。恒め局して鑄を下して。焯園ひらく周く見て曰。他異ある。唯荷

池中ふ萬金を瘞てあり。此崇を為らるゝと云ふ其二人の子之を
發えんと詣て。焞^{アハ}曰。金ふ柴寅實^{アハシミツヒト}が名字を鑄たり。吾何妄よ
取えりえやと云ふ。復其門と局し封を成し置ふ柴寅實と云
人も長垣の人也。此も進士よりゆく。其時某の縣と知事。一日
李焞公^{アハシミツヒト}坐し。城南^{アハシミツヒト}名の雲門山ふ對て在る。何莫ぞ獨
言へ。叔二人の隸を呼く。南山某の虎^{アハシミツヒト}ふ兩の狼^{アハシミツヒト}也。一の擔夫^{アハシミツヒト}
を厄^{アハシミツヒト}也。亟^{アハシミツヒト}往て救へ。緩^{アハシミツヒト}くばるべり無うくんと。隸命を受て
馳^{アハシミツヒト}往く。南門の外^{アハシミツヒト}至^{アハシミツヒト}。一伎館^{アハシミツヒト}と過て茶を索め飲^{アハシミツヒト}居りた。
焞堂上^{アハシミツヒト}坐し忽^{アハシミツヒト}然^{アハシミツヒト}を發へと曰。吾口嚴く諭戒^{アハシミツヒト}りつふ。彼者
伎館^{アハシミツヒト}ふ淹留すやと云ふ。且^{アハシミツヒト}て若者を遣て偵りそふ。果して伎館^{アハシミツヒト}

在^{アハシミツヒト}。知府の言ふを述^{アハシミツヒト}れ。大ふ驚^{アハシミツヒト}きく急^{アハシミツヒト}ぐて南山の下^{アハシミツヒト}に至^{アハシミツヒト}。見
え。一擔夫^{アハシミツヒト}西の狼^{アハシミツヒト}と鬪^{アハシミツヒト}く力盡^{アハシミツヒト}てやとく斃^{アハシミツヒト}きんとす。遂^{アハシミツヒト}ふ力を竭^{アハシミツヒト}
ての狼^{アハシミツヒト}を殪^{アハシミツヒト}。一擔夫^{アハシミツヒト}もかく死命をぞ助^{アハシミツヒト}り。其神異徃々
み此ふ類せり。郡^{アハシミツヒト}はをく疾^{アハシミツヒト}夏無^{アハシミツヒト}してゆり。一日二子を召て曰。呂仙^{アハシミツヒト}
我^{アハシミツヒト}とぞ。我まふ逝^{アハシミツヒト}んとすと云ふ遂に卒^{アハシミツヒト}。年五十二ありた。後
十四年柴寅實果^{アハシミツヒト}て青州を守^{アハシミツヒト}。池を發て藏金を獲^{アハシミツヒト}。
富邑中第一と成^{アハシミツヒト}。柴歿^{アハシミツヒト}。其子守^{アハシミツヒト}るの能^{アハシミツヒト}はず。竟^{アハシミツヒト}ふ敗落^{アハシミツヒト}
せりと語傳へたり。

成御史

前^{アハシミツヒト}の御史。樂安^{アハシミツヒト}地の成公寶^{アハシミツヒト}。勇^{アハシミツヒト}も。明の崇禎年中^{アハシミツヒト}疏^{アハシミツヒト}を上^{アハシミツヒト}て

黃公石齋がむごの罪を赦めを以て。責を蒙るも諱成夷の境み死罪の身と成り。清朝天下を得て後崑崙山中々隠れて居ける。一日大雪降る時絶頂に登て遙め松林の中をとどか。入有く僵臥てあり。意が凍死すべし。とぞ趨近づて視て四面皆雪積て人の跡も無き。此人木葉と衣とあり。臥居るが居る上處一丈をその中聊も雪あり。公の至るを起て曰。我公を俟久々と云ふ其年と向ふ懺めをびえす。但ゆき時京師ふ在て。楊椒山が罪をて西市め赴き斬らるゝを見て。遂ふ憤を發して出家して道戒学び。向ふ左蘿石。沈周泉の二公が見えらる。毎々公を薦て自代らんと欲へ。沈公曰。成公も正人あり。嘗て我を疑つ。今

其疑釋らる。と云ふと云ふ。成公えを以て。惘然として曰。昔沈公疏を上で漳浦を論ト。書を遣すと我あはづ。我答ふ。此事人の知る者あり。誠ひ發さうと云ふ。道人云。長堂の術。公は授べと云ふ。公の曰。吾も陳人である。速め死するを以て幸とす。生して何を為さん。道人云。聊公を試みはる。今より後二年を過ぐ。清明の日。當ニ二公を偕て公と候べーと言ふ。謝して去つて。歩むの飛ぶ如く。ゐる。公果して康熙戊戌年。清明の日。至り。病あつて逝ぬとす。

汪希大

汪希文も歙縣の縣人。少して尹鬚頭と遇て隨ひ侍る。久

始しまししし一い日ひ相あ別べつせんとして希き文ぶんよむか向むかてい日ひ子こ世よ縁えんわや。高たかめたか逢むりめ止とままとと云いく。一いの錢せんをを予あてて之のを掌てお握はらめく。曰い饑うゑす即そ此こをを視みふる。後のち十じ年ねん我わを姑お模もみるとと云いて別べつる。希き文ぶん辭さート去はる。常つふ食くをを以もてて。錢せん十じ計けいづづ掌てより湧あ出だる。叔お父ち彼かれ所所の郡ぐんを經へてて。高たか淳じゅんとと云い者ものの家いえあり。至いたる。兼まてての期とき至いたる。姑お蘇よ利りせし。希き文ぶん大だい拜めいして受うく。叔お父ち試ためむむ良よ。驗あわる。里さと人ひと之のを德とくとと仰あく。一い日ひ尹いん公こう遇あく。語ごてて日ひ。今いまより後あと二に千せん年ねん子こを南山なんざん嶽だけ名な候ま。待まえまとと云いて別べつる。希き文ぶん年ねん七しち十五じゅうご歲さい成せいて。其その書かずを出だして之のを焚ほく。日ひ。

後の人ひとと誤まる事ことあり。休やすゆゆ。襟えりを正ただしく坐すわりりて延のく。ある。

河南某縣仙

河南の某の府ふ縣けん入いり。其姓せい忘うく。黃巢こうしやくの亂らんを避さけて山さんに入いる。久ひく。食くを得らぬ。無むきふくよ。日ひ々に松柏まつばの葉はを采うて之のを食くて。遂ついに烟火えふを絶きく。岩洞いわのうどうの中なかに元もと坐すわて始はじむ。虎豹こひよう鹿かの千百群せんびゆん來きく。其傍そばを遠とおりりける。虎とらを動うごかかく。居ゐ。其の屬ぞくの形かたちして共とも。終す。動うごかかく。居ゐ。其後のちも見みる者ものも無むく。やがて。時とき々とき人間ひとと遊あそぶ。其人の二十餘代よの孫孫と遊あそぶ。宵よを月つきを以もて。止とままる。居ゐ。數すう月げつを過くわく。

之が為か子を抱きかどもしなう。蟄虫戸を打ふめ至てとびき。轍土
穴ふ坎とやまとく其中ニ又蟄し。雷聲を發する時ニ始て起坐り。
康熙十年某の縣令の子。病篤く瘠きびひまんと云ふ。醫
師も皆謝して去る。齋使云某の仙人能此疾を療すべし。若
其齋院は因まく禮を以て處で請ひ至らんと云ふ。今其言の
如く一往果て至り。令夫漏香を焚て跪き。拜一呼。如
仙人を以てす。異人を搖一避て敢て當らすと謝す。其子を
出して手をたふ。はづく視て嘗めと云て命一く社殿を作らじ
む。飲食を通す。穴を作り。彼子を誘て土室に入其戸を扃て家
入ふ戒て。潛か窺更に得能く。五日を過て戸を擊声也。

其扁と啓けば子が來つ。其形豐腴で平時の如く病瀕然と愈
たり。父母之を問ふ。云初の時兩人皆坐し。背を以て抵する。
其背熱するの火の如くあり。足の熱するの背よりも甚一カ所。
足のうちと抵て臥さむ。足の熱するの背よりも甚一カ所。
遂の精神至る。肌肉復生。病の體を失ふ。何の時も物を
知らずと答ふ。令夫婦の喜壁。物無し。金を以て謝せんといふ
事とも。受も。ようく布を送り。其内四疋を取て辭して
去り。途々正者となりて是を投ておき。御門と御花も皆
遣そく。無事。今此人ふ人と添て遣け共。行事風の如く。
奔ると馬と似て及ぶる能事と云て歸て報け。今歎息して

止なり。其貌五十計の人と見えなるとぞ。

薛衣道人。

薛衣道人と云ふ。姓も祝名。堯民家へ巢父と云ふ。洛陽の書生あり。少しく文を以て名め。明亡て制蠻と棄て醫と成て。自薛衣道人と號けり。仙傳瘍醫の術を得て。凡諸の惡瘍其藥少計を付ま。立どろふ愈。若くへ脛を断臂と折者。療治を請ひ治せざる無し。或も腹を割腸と洗ひ。腦を破て體を灌。あとする。華陀三国の時。醫術の如く神ゆべし。里中か賊か首を断られ。者ゆ。其子醫の神うらを知て家人を謂て曰。祝巢父ハ仙人あり。速く我為か請て來と云ふ。家人曰。卿君の言妄す。頸よ頭を連ねざ

者。繼彼ふ魂と返きの丹藥ありとも。りて能形骸の離まると治すべし。其子強く之を呼ぶ。堯民至て其胸を撫して曰。頭断じて共死尚だき。暖氣ゆ。暖氣生氣也。生氣ゆべし。急に銀鍼と以て其頭と項とを合算して縫。さく塗ふ末藥を以てし。炭火りそ熨。更暫しく入參湯を煎り。他藥を雜へ。其齒を啓せし之を灌入けり。須臾みて鼻は微々息出を。復熱酒を以て灌き飲焉。一晝夜を過ぐ。其子を呼て語る。乃糜粥を作て進む。一晝夜りて手足を養あ。七日を過ぐ。創合し。半月を経て故の如く成ぬ。家舉て拜謝。願ひて產の半を以て酬せんと云へども堯民受かず。玄ぬ。後終南山より道を修。終所を鄉す。子無く。其術傳

らぶとえ

趙如如

蜀の入が趙如如と云者歟。髯長く、軀偉あり。明の時邊將也。將を以
て成て已が難か死せる。康熙癸卯の年、崑山の何英と云者。浙各の衛
所ゆく趙如々と往遇り。何英鬼もんと寢て恐れもて處んとも。趙如
如云「吾」と子と大異姓の昆弟の如し。吾道を学びゆきを教うべし
云々。趙如如平生天紋術數の學、又精く。兼て五行遯法、又習す。
其難は殉つる古人の仙とひく。尸解せる者の如く然や。叔父の何英。天
雄舎の別駕館と為ゆり。趙如々も俗よ北乃して往み。常お一の黄馬
道袍を着て居ける。寒暑共々脱易る事無し。飲食を為ゆる。唯ひまう

酒をのみ飲たり。何英急のるゆゑも、人を楚国へ遣んとす。趙如々我
代て往べーと。其札を拈く。晨あゆく其幕、又返來ぬ。賚所の圓文を押
す。朱印。猶湿くゆりと。辛酉の年、保陽地に。時、撫軍官
大員實容を讙す。一の玉盤を高座ふ供す。趙如々近坐を進む。玉盤
を取て之を碎く。撫軍大驚く。趙如々笑て曰。子、鐵輔の大臣也。在
乎。何ぞ氣度の廣うるを。玉盤も後苑の井の中ふ在す。往て立ぐ
と云。人と遣く。是が玉盤本の事ゆて。趙如々を覗る。何く
往く。何ぞ氣度の廣うるを。趙如々を覗る。何く
至る者歟。趙如々。何故か贈する書を持て來ぬ。其丈よ云々。我近が
南海へ在く。道を修せり。子、眞名よ行んとす。必往びとすとめり。

然と云ふを何英聽うむして往々荆洲へ至て遂と卒ふたり。

松祖

平望里地名ニ楊碩甫と云者ゆりひ。父も遠き國へ往て盜め遇て。子が刀を断つと死せり。死せず一月有たり。楊碩甫之を以て自臂を研て筋骨を断つ。家至て貧し。或人より一年銀八両みきらめで請給せども。其子の学文を仕入る。二月ちとうすにて其寡婦病死する。子もありけり。楊碩甫主人ふ請て件の館金の中四両を先借しこ。棺を買んとするを主人許さず。楊怒て衣を拂て去りぬ。叔公も心を失ひ道を往く。一人の叟ふ遇り。野服してかきこびる。叟楊に向て曰。二十五里一株松。爛却芒鞋此是踪と言ひてあり。楊碩甫哀めりげゆ

思て老人の言の如く往く。果して大木ある。松の根ふ石なり。其上ふ爛くる芒鞋ある。取く視みて四金をぬり。持帰りて棺を買って葬る。然と云ふを楊住へた。家あけよ。今てみ前の叟ふ邊へん立まつて山林幽僻の地をそむく。あくたどり歩行る。數日あらずとく叟ふ遇ぬ叟が曰。吾今の姓を松名の年と云へ。汝が曾祖父と庠と同く遊びた。其時の姓名を汝に告るる無はずと云て。遂に挈て山深く入り。凡百里を往く。長き松百株を下りて三間をうりの茅屋わたり。四面壁無きを風雨のもの無し。中ふ石の几石の凳を置く。小童わく側み侍り居と共。黙りて一語を發せぬ。歎の声づふせむ。毎日午時童子茶一盃を淘て進む。松叟指を以て之を劃す。中より



分すと二とある。其伴飯ふ煮て熟すとども相雜らるゝ無し。叟人と童と其半を食ひ。楊ふ其半を食ちむ。飯の香へをの言べうとうず半匁ふ滿ざまども之を食つて。一日一夜をあき共饑す。此米何くより取出來ぬ。うら詫うとす。飯を食へ訖まだ。各趺坐し寂然とくして動キ。楊碩甫夜睡うんと欲しけども松葉と藉て臥す。隆冬の晩と雖寒きものあり。叟青紫宇袍と衣て居す。左の袂恒々下ふ垂て。左の手を露きゆるやうも。楊竊ふ之を窺つて。左の手を以て脣下を掩ひ無名指の甲長く延て。其腹を遼る度々七匝也。叔楊を畱るの旬日をうりへと語て曰。汝本べ。汝貧あれ筆を賣く活をあせ。汝が十金を與るわどふ湖州へ往く。二錢を以て十枝を買ひ。常熟名め至て

賣あひ三錢を得づべ。一びの往返は五金の利を得ん。是故を贍
き不足なり。利少とも募る事あり。筆も佳を賣べべらず。必常
熟え於てせよ他より往るを。汝此後名を賀公遠と改よ。慎ぐ。吾
言を守らむ。常山の山中へ至るべ。若戒る所はだらか。なるものを得
トと云う。楊酒を嗜て戲をそのみ有全。人皆癡とうとむ。
叟入て仙より遇つて。乍ら争て。夏を書。吉凶を訊。楊是義で
叟が前より置ば。叟視もかくも。一晝く文を焚き。十日又是一月を
名留す。楊歸らんとする時。叟指を水ふ蘸。一石の几の上の宣室を
書す。小童楷墨ひく文を写す。一つは雜く文を授與。山を下す
齒うち探ねく。其生いよ處の吉凶中らざるの無し。乙酉丙戌の

間叟楊公語て曰。吾將ふ粵西ふ往んとす。故入山に至るよりあつまひ。楊それより後仙の教ふ隨ひ賈スのミツを入て大額と成て。多く妾婢を置く復山ふ入事なし。達者例の吉凶を向んとそ強そ叟と尋徃しむる。前の山又登まけり。道又迷て徃びた方を知らばれ。此時ふ當て臨桂伯館瞿公と云人。粵名を撫定しと在り。靖江地王つゝき兵を起し。臨桂を囚て舟中ふ置き。餓一死を死さんと欲せ。然るふ毎日午時の法香飯の碗又半分を盛たる。艎板の上ふ置くゆゑ。臨桂之を食て終日終夜餓する。楊が説所の山中のさまの如。九年五月を經て。靖江王敗まく。臨桂免まくを得。翟人仙翁の貌を楊ふ訊て。像を作て之を祀りと稱して松祖と崇めけり。

羅道人

羅道人も家を棄て江湖の地を遊ぶ。十餘年をもして歸る。江夏山の中ふ徑起。後又衡岳山の麓ふ茅を結び。宅ふ垣を作らむ。堂ふ戸を設す。床龕も無く歛を断て坐し居る。斯くて居る更十餘年ある。身に青き毛長く生す。望るるふ烟火中の人非ぞ。客至るゆゑが惟云。臣と爲て忠を負し。子として孝ある是大道あり。歛を辭修煉する。其あさりと云々。人衣食を餽まし皆却て受む。強く留て往人ゆゑ。食を猿鳥ふ食へし。衣も石の上に甚じ置はる。自腐て跡も無きみる。其住家も虎狼の窟にして。荆藤徑を塞ぬ。之を訪る人縗襪を披く入る。虎狼ふ遇へ共害を

あらず。其山を熊羽經と云者の持る所あり。羽經病良多くて有けれ
ば糧を裹て山へ入る。道人よ隨侍して數日居てしが。病少く瘥る。
羽經云。夜半の比道人何方へ往め出往て日高て帰来す。是を悉
身露はぬ治めりと語りけり。其後訪者もども絶て共々語らむ。訪
者も月々稀に成ゆけりと云。

勞山道士

勞山の一名を勞山とも云ひ。即墨地の鬼ふ在す。山中一二百歳の人
多う。高密地の張生と云者。道觀ふ寓りて書を讀む時。老たる
道士の貌醜き。木を折草を取事はづれ居る。張意ふ忽ニ
忽ニ居を傍る。一日二匹の牛を買くる。張が家山を去る。百里餘の路

あらず。人の牛を引き徃者無ふ。思ふ。あらひる。彼道士張なりと
て來く。曰。君思所ゆふ。似て。牛の故きべ。吾君が為み牛を送り遣
らんと云ふ。張其言を異わりと名のく。とくも。中み牛を失て見え
どある。張生日を過ぐ。家ふ帰る。家人ふ問はず。家人曰。某日某時
道人二牛を送り。あらと云ふ。其時を憶ひ。及ばず。山中み立て道人と
物語せ。時と同頃あり。依て非常の人を対しと知て大よそを禮せり。
又一日張其門弟を集めて。周易を講じ。居る。道人窓の外あはれて之を
聽く。呼く。曰。君が述る所皆俗説なりと云ふ。試み之を問へ。名理人意の
外かぬ。張生其学を受遂。易方と説事を以て。東方ふ名を禮す
せり。一日夕暮の法大雨あり。雷電。恐れ。張生門を

閉て居るが窓の隙より見ゆ。天神數百輩。道士の房外ふ圍で立て禮を作せる狀をあせらる。張生驚き恐れて。声を立せずて唇を明る。曙が成て雨止れば門を開て往て視る。道士の門鑰とく寂とく人無し。此夜山中の道観數十百處皆道士を見ゆ。未だ無名なり。

宋道人

宋道人ハ長治肆の人也。幼比孤とありて頼父方也。人の為に羊を牧く霍山の中め居る。一日羊の跡失く往方無かりけども。數々の羊と牧者傍徨と途を失ひ。宋年十三也。獨深山に入れり。あらわすとある。之を求る。行事二日入の老う僧の眞て石窟の中め坐

せるを見る。四方め人跡無し。僧の面黄毛生て一すねうり。心め異人ありと知り。曉て其故を陳け。老僧目を張りて曰。汝が羊固在室。中秋を待てば出で。今且帰べと云ふ。宋歸て残の牧者を告げ。其期未及て引連て往る。果て羊を得たり。此時外の羊四五百頭を没す。老僧を尋け。もと見えざりけど。衆人議へ。其餘の羊と齋闍て百金を得たり。既め金を分らる。平手と手と。異論を起す。云者有て。之を官め聞へ。官其金を宋の物ありと判へ。度す。其徒の中め王姓ある者ゆ。知ふ宋の金を指すと利と。口とと言ふ。ぬかすと云て。宋と欺く。已が家め誘ひ。金の口入と。やうんと。傷て。夜宋が居所は已が婦をひく。後うちほゆく入來て。姦夫をと呼て

宋を逐ひし。宋財を王姓ふ取らまく依る所なし。又山ふ入て往往
ふ遙うる所は至り。一の茅庵のわざを見る。内は彼老僧居す。宋辨
して泣々故を告げて留め。樵をさしめ。久々して之を許せり。
老僧多く食せず。厨中か有りのれ。唯燕麥。蚌魁のまゝ。宋之を食
て飢む。斯く五年立を居たまふ。老僧宋を勧て山をかよと云へば。宋
留ひ居て行む。老僧の曰。汝實法あり。其性鈍根きど如何せん。
汝壁の上か畫なる古丈夫五を視よ。一も正面。一も側面。一も背面。二人を
其傍よ偶坐せり。汝日々此骨筋を視覺え。皆よく意を留むと云。
宋茫然と。其言を解て得む。唯日々其下か坐臥し居たり。
宋茫然と。其言を解て得む。唯日々其下か坐臥し居たり。
夢中か兩人の人生。壁下か有て。銅人の穴道脈絡を示す。宋豁然

とうと悟る。一日老僧遠く出と。宋を留て家を守らむ。庵の前
後を悉く虎狼の住所あり。七日を過て。老僧歸て宋と謂て曰。山
中檀越の家我を邀て經を誦む。汝從ひ徃べと。誘ひて坐らるが。
半途よして又曰。汝を此止て居て。木魚の声と汝あが乃来て。我と迎
よと云々。山を覗て徃る。宋待居る。日影も漸移り。腹も饑る。至と共
老僧を召す。跡を尋て徃んと。たゞ徃の河の。河邊翁
嫗と童子二人と河水を汲て居る。師の徃一所を問ひ答て曰。此處入
家無し。いんぞ僧を請て經を誦する者やうんと云ふ。已むろを導く
河を渡て。徃の峭壁天を拂ふ。徃の道も非ず。忽木魚の声北
山の方小室をければ。馳往て。又声南山の方有す。日影暮の方

上虎百十餘出く咆る。急き翁媼が處か走入る。木柵石
屋の中か住めり。鷄犬も庭めあり。翁號く叱咤とば。君輩虎皆耳を
弭く去ぬ。翁宋を留て宿らしむ。啖くも下駄の糞を以てモ。曉ニ
及く睡覺く視せば。身を盤石の上か臥居る。夜がなる屋柵皆見
えモ。驚きあひと在レガ斯く在矣。多と宿を舊路と尋て菴み廻らん
とまふ道。一人の婦人か違ひ。井のあを以て其背を擦く
居。之を洞て跌傷。其骨を折まうとい。宋其完脉を審み
しく試み。之を按摩をま。みよ應どく愈ぬ。婦人家か誘く飲
食をさせ。厚くひそむ。是より居を求めて住ミ。人の為ふ按摩
の術をあまふ。骨破碎る者も愈せとりある無うだ。久く有て妻を

娶く子を生み。巡撫都御史。圖克善と云人。之を重んド。其子の
為ふ栗を大学に入さんと欲す。且宋受ぞ。すぐ人の錢を受
ざり。後ふ福山の王尚書の第み在リ。年七十三歿。成ゆける。
居易錄と云ふ書み見えり。

張谷山

張谷山を頼州の人。日々小兒と嬉戯す。人其有道の人もる
を知らばりけ。張の表兄あり。荊州み往て。且帰らざり。餘
敵の時表兄が婦。餽飪を製。先祖を祀く。夫が遠き國み客を
念く愁ひ歎く。張谷山側か在く。曰。娘。憂愁。更あま。吾娘のみ今
日兄の所か至り。餽飪を寄て信を為さんと云。頼名の地荆園をまつ

二千餘里ゆき。日ひまご暮を移さざる已ふ返す來て云。薦め至て兄よ
見えぬふ兄恙あへかせりと云。姨真とせきみけむ。谷山懷より家書
をかへ。丈夫の昔の絮衣をかへて。此のど綻あらんと云う。毛ようひ
始く其神異と驚鳴たり。後武當山ふゆく。終る所を被ト。二の陶器を
遣へたるが。盛頗め肉を盛置く。腐る事無一とある。

邱生

金陵地の邱翁と云人。平生善を極く。釋氏道人を敬する。篤し。
邱翁一子ゆ。書生と成て文名あり。年二十歳成ぬゆ時。忽遍躰骨
痛。方藥聊も效か。タゞ一々身體漸縮り。少しき成る。日々二
三寸づ短くぞ成る。邱生素長高八九尺。數月の後。一寸餘の人と成。蠅

某の如き。戸と作せん人之を几案の上に置。茶碗と以て覆ひがゆ。某
邱翁も幅もゆりそくせんすゞを被ト。一日道士の形清げあるが。門外の坐
し。數日うち寢無く。入社鉢あど元氣あらわゆ。翁延て招び
ひく之を問。初め言さず。再三向ひて始て云。君は家異あると
ゆりや。翁悟て。媿を呼出。其禮拜して子の疾る状を述ぶ。道士の
曰。吾之を知り。君が積善ゆるを以て遠くよりあつと。茶三碗を取
て。日夜深く暗處ゆく。自水を取く。之を服せしめよ。三日の後。必驗ゆる。
但燈火とおなじあると。婦人の手と近づくと。言畢て。飄然
と。翁其教の如く用ひ。次の日。其手を視ま。数尺をす。長
く。又日を踰て。身長舊の如く。成る。三日の後。道士竟め至る。

通俗排闥錄卷之十終

通俗排闥錄卷之十終

翁の不思議あまし。第三城を試みる開視。内に一寸計の
小室たり。躍りて巻上から落り。本を見よども得失を知らず。誕生遂に
書生と謝。道装を為して行ひけり。今五十餘歳、尚生て在と居易
録より書く。

